



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4354 号 2018.5.2 発行

アートな「お魚 T シャツ」障害者グループと釣具店コラボ 高知市



高知新聞 2018年5月2日
釣具店と障害者がコラボした魚の T シャツと、作者の 1 人、金子仁麗さん (高知市はりまや町 3 丁目)

障害者が創作活動に取り組むアトリエ「アートセンター画楽 (がらく)」(高知市はりまや町 3 丁目) が、同市内の釣具店と協力した「お魚 T シャツ」を制作し、5~12 日に期間限定で予約を受け付ける。アカメやカツオといった高知の魚のほか、空想の魚も描いており、個性的で愛嬌 (あいきょう) あふれるデザインが特徴だ。夏に向けて、釣り師でなくても 1 枚いかが？

画楽では、10~60 代のメンバーがイラストを描き、T シャツなどのグッズにして販売する活動をしている。代金の一部が作者の収入になる仕組みだ。

昨秋、メンバーの金子仁麗 (じんれい) さん (19) はイカを描いた。釣り好きの父、昭一さん (49) の要望だった。

昭一さんは早速、購入した T シャツを着て、釣具店「フィッシングハヤシ」(同市梅ノ辻) に買い物に行ったところ、顔なじみのスタッフに大好評。これをきっかけに、同店が画楽に T シャツ用の魚のデザインを依頼した。

メンバーの作品を組み合わせた T シャツはカツオ、アカメなど 4 種類。このうち「なんとかっていうさかな」と題した作品は、一見魚には見えない自由なデザイン。味わい深い線と色使いで、切り身を描くなど独特の発想も面白い。

きっかけをつくった昭一さんは「T シャツを通じ、息子たちの活動を知ってもらえたらうれしい」。画楽で作品制作をサポートしている国元佐恵さん (25) は「『魚』を捉える視点の面白さを感じてほしい」とアピールしている。

1 着 3500 円で、白、黒、グレー、紺の 4 色。予約はフィッシングハヤシ (088・831・8888) へ。(八田大輔)

強制不妊手術の実態とは 神戸の聴覚障害者が学習会 神戸新聞 2018年5月2日



「対象者は高齢になっており、一日も早く救済したい」と訴える兵庫県聴覚障害者協会の本郷善通理事長=1日午後、神戸市中央区橋通3、市障害者福祉センター

旧優生保護法 (1948~96年) 下で障害などを理由に不妊手術が繰り返された問題で、兵庫県聴覚障害者協会 (神戸市中央区) などは1日、同区の市障害者福祉センターで、被害の実態調査に向けた学習会を開いた。聴覚障害がある人や支援者ら約70人が、約50年前に肉親から不

妊手術を強いられた同市内の男性（79）と妻（77）の心境に聞き入った。

この問題を巡っては、「全日本ろうあ連盟」（東京）が3月下旬から、聴覚障害のある人や家族らを対象とする初の全国調査を実施。兵庫では、同連盟から依頼を受けた県聴覚障害者協会や社会福祉法人「ひょうご聴覚障害者福祉事業協会」（洲本市）などが協力し、5月下旬までに可能な範囲で当事者らから被害の実態を聞き取るという。

学習会で、男性は1968年4月に結婚する前、両家の父親が「結婚の条件」として決めた不妊手術を受けさせられたとし「子どもができていたかもしれないという苦しい思いをずっと言えなかった」と話した。「同じ思いをしている人がたくさんいるのは残念。若い人には同じ思いをさせたくない」と力を込めた。（田中宏樹）

はしか 軽視は危険 妊婦・流産の恐れ 乳幼児・難病発症も

東京新聞 2018年5月1日

沖縄県を中心に感染が広がっているはしか（麻疹）。妊婦が感染すると流産につながったり、赤ちゃんの時にかかったはしかが原因で脳にウイルスが入り寝たきりの難病になったりと、あなどってはいけない病気だ。ゴールデンウィークで人の移動が増えることから、医師や患者家族会らが感染拡大に危機感を強めており、ワクチン接種による予防を訴える。（細川暁子）

国立感染症研究所によると、今年一月から四月十五日までのはしかの患者数は全国で六十七人で、二十～四十代が約八割を占める。沖縄で三月下旬、旅行に来た台湾の三十代男性がはしかと診断されたのを皮切りに患者が急増。台湾の男性からは「D8」という型のはしかウイルスが検出され、他の患者からも同じウイルスが見つかった。

四月には、沖縄に旅行した十代男性が「D8」型のはしかにかかり帰省先の名古屋市内の病院を受診。この病院で働く女性や病院にいた中学生らが感染するなど広がりを見せている。

はしかは空気感染するため、局地的に広がるのが特徴だ。十日ほどの潜伏期間を経てのどの痛みや目のかゆみ、鼻水、くしゃみなどの症状が出る。細部小児科クリニック（東京都）の細部千晴医師は「この段階では、はしかか風邪か、診断するのは難しい」と話す。

三八度ほどの熱が数日続き、全身に赤いぶつぶつの発疹が出る。特効薬はなく、解熱剤やせき止めなどで体の回復を待つしかない。肺炎や中耳炎などを合併することも多い。妊婦は重症化しやすく、流産や早産の原因になることも。

最も怖いのが、乳幼児期に感染した麻疹ウイルスが脳内に入り、数年の潜伏期間を経て発症する「亜急性硬化性全脳炎（SSPE）」という難病だ。発症するのは十万人に一人程度といわれているが、徐々に脳の機能が低下し寝たきりになることもある。

予防はワクチン接種が有効。現在は一歳と小学校入学前の計二回、定期接種を受ける。ワクチンは二回接種で免疫がしっかり付くとされているが、定期接種は一九七八年から始まりかつては一回だけだったため、二十代後半～四十代の子育て世代に免疫が不十分な人が多いとみられる。



細部医師は、「大型連休中に感染が広がりかねない。ワクチンは、しっかり二回打ってほしい」と話す。

はしかが原因で寝たきりになった辻海人さん。先月、福岡で開かれた「日本小児科学会学術集会」に参加した（家族提供）

◆1歳前に感染した辻海人さん（19）

東京都町田市の辻海人（かいと）さん（19）は、赤ちゃんの時にかかったはしかのウイルスが脳に入り、SSPEになった。はしかに感染したのは生後十一カ月の時。一歳からが対象のワクチンを受ける直前だった。

はしかの症状は約一週間で治まり、海人さんはサッカーが得

意な元気な男の子に成長した。だが二〇〇六年、小学二年生の時に異変が起き始めた。ボールをうまく蹴れない、九九が覚えられないなど運動能力や学力が急激に低下し始めた。

病院で検査を受けると、SSPEを発症していることが判明。それから半年後には歩いたり話したりすることもできなくなり、以来寝たきりの生活を送る。

母親の洋子さんは患者家族会「SSPE 青空の会」の一員として、はしかの怖さを周知してきた。同会には約五十人が登録し、ほとんどが二歳未満ではしかに感染した。洋子さんは、四月二十日に福岡市で開かれた「日本小児科学会学術集会」にも海人さんと参加。会場でチラシなどを配りはしかの怖さを訴えた。

洋子さんは「SSPEはあまり知られておらず、はしかなんて、たいしたことがないと甘く見る風潮があるのではないか。感染拡大はワクチン接種で防げる。小さな子や妊婦さんを守るために、みんなが当事者意識を持って、感染を食い止めてほしい」と力を込める。

高齢者の多剤処方 国が指針…薬減らして副作用改善も

読売新聞 2018年5月2日

薬に起因する有害な症状の例

症状	薬剤
ふらつき・転倒	一部の降圧薬(中枢性降圧薬、α遮断薬、β遮断薬)、睡眠薬、抗不安薬、抗うつ薬、てんかん治療薬など
記憶障害	一部の降圧薬(中枢性降圧薬、α遮断薬、β遮断薬)、ベンゾジアゼピン系睡眠薬・抗不安薬、三環系抗うつ薬、てんかん治療薬、抗精神病薬など
せん妄(幻覚・妄想、錯乱、興奮など)	パーキンソン病治療薬、睡眠薬、抗不安薬、三環系抗うつ薬、抗ヒスタミン薬など
抑うつ	中枢性降圧薬、β遮断薬、抗ヒスタミン薬、抗精神病薬、抗甲状腺薬、副腎皮質ステロイド
食欲低下	非ステロイド性抗炎症薬(NSAID)、アスピリン、抗不安薬、抗精神病薬など
便秘	ベンゾジアゼピン系睡眠薬・抗不安薬、三環系抗うつ薬、過活動膀胱治療薬(ムスカリン受容体拮抗薬)など
排尿障害・尿失禁	三環系抗うつ薬、過活動膀胱治療薬(ムスカリン受容体拮抗薬)、腸管鎮痛薬、抗ヒスタミン薬など

(高齢者の薬の適正使用の指針案から)



薬を見直し減らすことができたケース



複数の持病を抱え、多くの薬を飲む高齢者が、ふらつきや認知機能の低下など薬の副作用に悩まされるケースは珍しくない。厚生労働省は来月にも、薬の見直しの手順などを示した「高齢者の薬の適正使用の指針」を初めて策定する。主に医師・薬剤師向けだが、高齢者とその家族にも参考になる点がある。

認知症、糖尿病、高血圧を抱える東京都大田区の元自営業男性(76)は以前、11種類の薬を飲んでいて、総合病院に6年間通院するうちに「年金を取られた」などの妄想が激しくなり、興奮を抑える薬の量が次第に増えたという。

身の回りの世話をする長女(55)は「薬が増えても症状の改善はみられず、むしろ父のイライラは悪化する一方。携帯電話から1日100回近くかけてきて、大声を出すので困っていました」と振り返る。当時は足元がふらつくことも多かった。

昨年1月から男性を訪問診療するようになった、同区のとかせクリニック理事長、高瀬義昌さんは、薬の見直しに取り組んだ。増える一方だった興奮を抑える薬は効果が見えないので別種に変更。4種類出していた糖尿病の薬は週1回1錠で済む1種類にした。

結局、現在飲む薬は計6種類で、以前のほぼ半分だが、「かえって妄想や興奮も減った。血糖値も血圧も安定した」と長女は改善を感じている。

高瀬さんは「高齢者の診療では、悪い症状が病気のせい、薬の副作用かを見極め、薬を必要最小限に整理する努力が必要だ」と指摘する。

高齢者は、薬を分解する体の機能が低下し、副作用が出やすくなる。使う薬が6種類以上になると体調不良が特に増えるとの報告もある。

そのため慎重な薬の投与が求められるが、そうした配慮が必ずしもなされているとは言えない。厚労省の調査によると、75歳以上の25%が一つの薬局から7種類以上の薬を処方されていた。

自己判断で中止は危険

既に示された指針案では、通院先が多いために薬が増えるケースに加え、副作用で出た症状に薬を足して対処する悪循環が起こる可能性を指摘。医師らが全ての薬を把握した上で、有害な症状が増えていないか、薬に見合った効果が出ているか、定期的にチェックするよう求めている。

ふらつき・転倒や抑うつなど、薬の影響で出やすい症状と主な原因薬剤も示している。例えば、不眠を訴える高齢者に処方されることが多いベンゾジアゼピン系の睡眠薬・抗不安薬などは、ふらつき・転倒や認知機能低下などにつながる危険がある。

指針案は、薬の減量や中止で改善することがあることを患者らに理解してもらう必要があると明記している。

「ただし、自己判断で薬をやめると急激に悪化する危険もある。薬に疑問を感じた人は、必ず主治医や薬剤師に相談してほしい」と指針案をまとめた東京大教授の秋下雅弘さんは話す。

高齢者の薬を巡っては、4月からの診療報酬改定で過剰と思われる薬の見直しを医療現場に促す項目が増えた。薬剤師が6種類以上の薬を飲む患者の減薬を医師に提案し、2種類以上減ると、新たに薬局に報酬が付く。

薬が減る場合、主治医、薬剤師から患者に説明がある。不安な点は、その際によく聞いておきたい。（高橋圭史）



グリズデイル・バリー・ジョシュアさん＝外国人障害者のための日本観光サイトを運営する 毎日新聞 2018年5月2日

グリズデイル・バリー・ジョシュアさん＝谷本仁美撮影

グリズデイル・バリー・ジョシュア（Grisdale Barry Joshua）さん（37）

障害のある外国人のための日本観光情報サイト「ACCESSIBLE JAPAN」を運営する。生後6カ月ごろに出た高熱のためか、手足に障害が残り、車いすを利用。2007年から東京都江戸川区で暮らし、「地域に貢献したい」と16年に日本国籍を取得した。外国人観光客の視点を研究していて、レポートするため、全国の観光地を巡っている。

「みんなができることはジョシュもできるよ」と言われて育った。高校時代に日本語を学び、卒業後に来日。東京都内の浅草寺に参拝した帰りに電車に乗ろうとしたが、地下ホームに降りるエレベーターがなく、駅員が6人がかりで電動車いすごと運んでくれた。「お客様は神様という『おもてなし』の心がすごい」。古里のカナダにはない日本流の気遣いを鮮明に覚えている。

日本各地の観光地を紹介するホームページで、英語版のバリアフリー情報が少ないことが多いと気づき、自らサイトを開設した。毎日、各国から届く相談から、旅行者向けの福祉機器のレンタルがほとんどないことや、ホテルのバリアフリー室を海外から予約する難しさに気付いた。もどかしさを感じつつも、「情報を提供して役に立ちたい」。

20年の東京五輪・パラリンピック開催に向け、東京だけでなく、日本そのものの魅力

を発信したい。「日本はバリアフリーが進んでいるとアピールしたい。世界の仲間たちに、来日をあきらめてほしくないんです」<文と写真・谷本仁美>

■人物略歴 カナダ・トロント出身。社会に感動を与えた市民を顕彰する2017年度「シチズン・オブ・ザ・イヤー」を受賞。



Stand・by・you! そばにいるよ 痛み分かるからこそ
全盲の弁護士 大胡田誠さん(40) 毎日新聞 2018年5月2日
大胡田(おおごだ) 誠さん

多忙を極める。本来の法曹の業務に加え、毎週のように講演がある。日本で3人目の全盲弁護士という目新しさからだが「健常者だけでなく、障害者自身も『何もできない』と諦める。両者の意識を変えたい」との思いで広告塔を買って出る。

12歳で先天性緑内障のため光が奪われた。希望を失って間もなく、全盲で初めて弁護士になった竹下義樹さんの著書に出会い、本人を訪ねた。「勝手に限界を作っている」と諭され、2006年、5回目の挑戦で司法試験に合格した。

全盲ゆえの苦労はある。例えば、暴力を振るわれたという依頼者の傷は見え、目になる「同僚」の助けがいる。しかし、だからこそ人の痛みを理解し、できる仕事も多い。脳梗塞(こうそく)で職を失い、万引きを繰り返した男性は「先生の姿を見て勇気づけられた」と更生を誓い、点字翻訳を始めた。

東京都盲人福祉協会の青年部会長として、企業で働く視覚障害者12人の体験談「私たちの挑戦」も編集。「障害者も活躍できると経営陣に伝えたい」と狙いを語る。

全盲の妻と2人の子がいる。半生を近著「決断。全盲のふたりが、家族をつくる時」(中央公論新社)にまとめた。「全盲同士の結婚は無理と言う人もいたが違う。できないのは車の運転くらい」と笑う。【田中泰義】

発達障害者の就労支援 県、佐賀市にセンター開設 佐賀新聞 2018年5月2日



佐賀県が開設した発達障害者就労支援センター。相談員2人で対応する＝佐賀市駅前中央1丁目

佐賀県発達障害者就労支援センター「SKY(スカイ)」が1日、佐賀市駅前中央1丁目にオープンした。発達障害に特化した就労支援施設は県内で初めて。相談員2人で対応し、当事者や家族の就労の悩みを聞き、助言したり支援機関を紹介したりする。利用無料。

県がNPO法人「それいゆ」(同市)に委託した。企業担当者からの相談も受け付ける。相談は完全予約制。事前に受け付けシートで、これまでの職歴や職場

での困りごとなどを記入してもらう。

発達障害の特性によっては、コミュニケーションが苦手だったり、こだわりが強かったりすることで、職場で人間関係のトラブルが起き、仕事が長続きしないケースがあるという。相談支援では、個々の特性に応じて助言する。

職場見学やハローワークへの同行などの就労支援、発達障害をより多くの人に理解してもらうためのパンフレット配布や企業向け研修など啓発・事業所支援にも取り組む。同センターは「相談するべきか迷う方もいると思うが、さまざまな支援機関につなげることもできる。気軽に相談に来てもらえれば」と話す。

センターは、午前9時から午後5時まで。専用駐車場はない。土日祝日は休業。問い合わせは同センター、電話0952(20)2971。

西三河児相自殺 「遺書の可能性、否めず」第三者委見解 毎日新聞 2018年5月1日

愛知県西三河児童・障害者相談センター（児相、岡崎市）の一時保護所で今年1月、保護されていた少年（16）が居室内で自殺した問題を巡り、課題を検証する第三者委員会の初会合が1日、同保護所で開かれた。委員長の折出健二・人間環境大特任教授（教育学）は、少年が最後に渡した手紙について「遺書の可能性があることは否めないと思う」との見解を示した。

第三者委員会は弁護士や大学教授、小児科医らで構成。個人情報扱うため会合そのものは非公開だったが、折出委員長が会合終了後、取材に応じた。

折出委員長によると、この日は少年から手紙を受け取った男性職員ら3人から当時の様子などを聞き取り、少年が生活していた居室を視察した。

この問題では、少年が心肺停止で見つかる約1時間10分前に家族宛ての手紙を職員に託していたが、県は「内容から遺書でない」と判断し、手紙の存在自体を公表せず、対応のまずさが指摘された。折出委員長は「少なくとも遺書ではないと、はっきり断定できる要素は何もない」と説明。遺書かどうかを判断するには「慎重に扱わなければいけない」としつつ、「自殺する当事者が直前に残した文書なりメモなりはそれぞれ固有の意味を持っている」と述べ、少年の手紙が遺書であった可能性を指摘した。

少年は4畳半の1人部屋の居室で、クローゼットのポールにシーツをかけて首をつっているのが発見された。現場を検証した折出委員長は、出入り口付近から室内を見ても、押し入れがあるためクローゼットは死角になっていたと指摘。構造的に改善の必要性があることを示唆した。

第三者委員会は今後月に1回程度のペースで職員や関係者の聞き取りなどを実施。了解が得られれば少年の遺族からも話を聞きたい考えで、年度内をめどに報告書をまとめる。

【道永竜命】

【ことば】愛知県西三河児童・障害者相談センターでの少年自殺

深夜徘徊（はいかい）したとして警察に補導された少年が今年1月23日夕、一時保護所の居室内で首をつっているのが見つかった。少年は自殺する直前、同居していた母親代わりの女性に「お母さんってよんでみたいなって思った時があつて でもはずかしくて言えなかった」「めいわくかけてごめんなさい」などと記した手紙を残していた。県は翌24日に記者会見をしたが、「遺書は見つかっていない」と説明していた。

驚きがすべて、パラアートにハンディなし 高橋陽一氏 SOMPO パラリンアートカップで作品を募集 日本経済新聞 2018年5月2日

一般社団法人障がい者自立推進機構は、障害者アートの認知向上のためアート作品のコンテスト「SOMPO パラリンアートカップ」を毎年開いている。2018年のテーマは、「スポーツ」に関するすべてのこと。9月14日まで作品を募集する。前年に引き続き審査員を務める漫画家の高橋陽一さんはNIKKEI STYLEのインタビューで「作品を見る際に障害の有無を意識したことはない」と断ったうえで、「驚きのある作品を期待している」と語った。

——作品の審査では、何を重視していますか。

「17年に（高橋陽一賞に）選んだ『昔の思い出』という作品は素直に田舎の風景が表現されていて、抜けた感じの気持ちよさが伝わってきました。スッと心に入ってきて、これだなと思いました。逆に、16年は抽象的なイメージの『大好き！サッカー』という作品を選びました。2つの作品には違う感覚があったのですが、いずれも（審査していて）『良い感覚がきたな』と思い、選びました。基本は直観です。ピンとくるものを毎回選ぶようにしています」

——今回はどんなことに期待しますか。

「サッカーとバスケットボールにテーマを絞っていた前回とは異なり、今回はすべてのジャンルのスポーツになり、自由度が増しました。人それぞれ好きなスポーツは違うでしょうから、サッカーやバスケットボール以外のスポーツが好きな人も、それならば（作品を）出してみようと思うようになり、より多くの作品が集まればいいなと期待しています」

「自分が好きなスポーツを描けるので、いろいろなタイプの作品が集まるでしょう。こちらが予想していないような作品が出てくると、『オッ』と思って選んでしまいそうですね。そんな驚きがある作品を待っています。毎回審査するのが、とても楽しみなので、今回も期待しています」

——審査をしていて、障害者アートならではの特色を感じることはありますか。

「作品を審査するとき、障害を抱えているということは意識していません。障害者の人も健常者の人も作品を発表するという点では、まったく同じですよ。もちろん『障害者が持つ力を表現し、世間に広める』というパラリンアートカップの趣旨に賛同していますから、ここから将来、世間に名の知れたアーティストが出てきてほしいですね」

——17年には、目の不自由な選手がプレーするブラインドサッカーをアニメにしました。なぜですか。

「20年には五輪だけでなく、パラリンピックにも、たくさんのお客さんに（競技会場に）来てもらって、盛り上がるという感じでしたから、応援したいと考えました。ただブラインドサッカーのアニメで描きたかったのは障害者アスリートということではなく、普通のアスリートとしてのすごさ、格好よさです」

——強豪のブラジル代表を相手に、主人公が新技「トルネードタイガー」でゴールを決める場面があります。格好よさに憧れる人もいるのではないですか。

「あれは漫画としての表現です。期待としては、まずはアニメからブラインドサッカーに興味を持ってもらい、実際に競技を見に行こうという気持ちになってもらいたい。もっと多くの人に（ネットなどで作品を）見てもらって、興味を抱く人が増え、それがパラリンピックにつながってほしいなと思います」

——代表作『キャプテン翼』も18年4月からテレビ東京などでアニメ放映が始まりました。どんな人に見てほしいですか。

「初めてアニメ化されたのは1983年ですから、最初の作品で育った人たちは、もう今はお父さん、お母さんになっています。ぜひとも、お子さんと一緒に家族で見ていただきたいですね。昔からのファンにも見てもらいたいし、新しいファンも開拓したい」

「今回はできるだけ原作に忠実に描いていますが、その一方で、（80年代にはなかった）携帯電話も出てきますから、最近の子供にもなじんでもらえるようになっていきます。昔の作品というよりは、現代の作品だと思ってもらいたいので、『現在進行形』を意識して描いていますよ」

——今回のキャプテン翼のアニメ作品に関連して、海外での番組販売や、仮想現実（VR）を使ったゲーム化も予定されているようですね。

「海外の子供たちにも、もっとキャプテン翼という作品を好きになってもらいたい。漫画から派生したゲームでも作品の世界観を味わってもらえることができるでしょう。逆に、ゲームから作品の魅力を感じて、漫画の方にも関心を持ってもらうのもいい」

——20年の東京五輪に期待することは。

「1964年の東京大会のときには、外に出てマラソンの応援をしていたと親から聞いてはいるのですが、自分の中でははっきりした記憶はないですね。五輪は時代とともに変わっていて、東京大会も今回と前は違います。今回はコンパクトに開催するとか、お金をかけないようにするとか、成熟した国で開く大会にしたいですね。日本人は精神的にも成熟していて、礼儀正しく、日本はきれいな国だということも、海外から来るお客さんに伝わればいいと思います」

——五輪は文化の祭典でもあるといわれます。日本の良さをどう海外に伝えますか。

「漫画やアニメにも触れてもらって、日本の文化に一段と関心を深めてもらえたらありがたい。日本の漫画やアニメのレベルは高く、世界に通用すると思います。そういう面でも、20年の東京大会を盛り上げていくことに自分が協力できたらいいと思います」

(聞き手は山根昭)

高橋陽一 1960年東京都生まれ。80年に読み切り作品の「キャプテン翼」で漫画家デビュー。81年から「週刊少年ジャンプ」で同名作の連載がスタート。アニメ化されサッカーブームの火付け役となった。現在は「グランドジャンプ」で「キャプテン翼 ライジングサン」を連載中。芸能人フットサルチーム「南葛シューターズ」の監督も務める。

SOMPO パラリンアートカップ 損害保険ジャパン日本興亜がトップスポンサーになり、日本経済新聞社などがメディアパートナーを務めている。2018年のコンテストで募集する作品はデジタル絵画、色鉛筆画、水彩画、油絵、切り絵、版画など。サイズはA4判からA3判まで。作品の提出期間は5月1日から9月14日。11月に審査結果を発表、表彰式を開く予定。問い合わせはパラリンアートカップ2018運営事務局(電)03・5565・7279まで。

<災後に育つ>学校は背景見て対応を/岩手医大いわてこどもケアセンター副センター長



八木淳子さん

河北新報 2018年5月2日

やぎ・じゅんこ 福島県立医大卒。盛岡少年刑務所医務課などを経て2013年4月から現職。震災後、岩手県沿岸部で被災した子どものケアに従事する。山形市出身。50歳。

東日本大震災と東京電力福島第1原発事故から7年が経過し、被災地の学びやは「災後」の2011年度生まれの新入生を迎えた。岩手医大いわてこどもケアセンターの八木淳子副センター長、宮城教育大大学院教育学研究科の小田隆史准教授に、子どものケアや持続的な防災教育などを聞いた。

震災後の11年度に岩手、宮城、福島3県の沿岸部で生まれ、生活する子ども223人の調査を16年度に始めた。保育園や保健師から聞こえてきた「震災後生まれの子どもたちに落ち着きがない」という声がきっかけだった。

診療での実感とも一致したため、調査して支援するのを感じた。絵画の作成や積み木の操作を通じた認知発達の調査で、同年代と比べて遅れがみられた。語彙(ごい)は半年の遅れがあった。

保育士の観察で、子どもの36.5%に情緒、行動上の問題があるという。母親は3人に1人が精神的な不調を抱えており、子どもの認知発達の遅れと関連がみられる。

震災を直接経験していなくても、家族の精神状態を通して影響を受けているのではないか。震災後の混乱期に乳児期を過ごした子どもは、生きていく基盤となる『愛着』の形成が十分でなかった可能性がある。

平時であれば「ちょっとのんびり屋さんだね」「元気があるね」という程度で済んでいた状況が、家族や地域によるサポートが目減りしたため、情緒や行動上の問題として表れているのだろう。学校は単純に発達障害と結び付けず、児童や家庭の背景を見ながら対応してほしい。

これまで保育園と連携してきたように、小学校とも連携を確立したい。調査を12年間続けて、結果をフィードバックしながら必要な支援につなげたい。(聞き手は報道部・庄子晃市)



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行